平成１９年１０月２１日（日）

みなとまちづくり生涯学習講座
シリーズ　海港都市「神戸」を語るPart２〔第１回〕

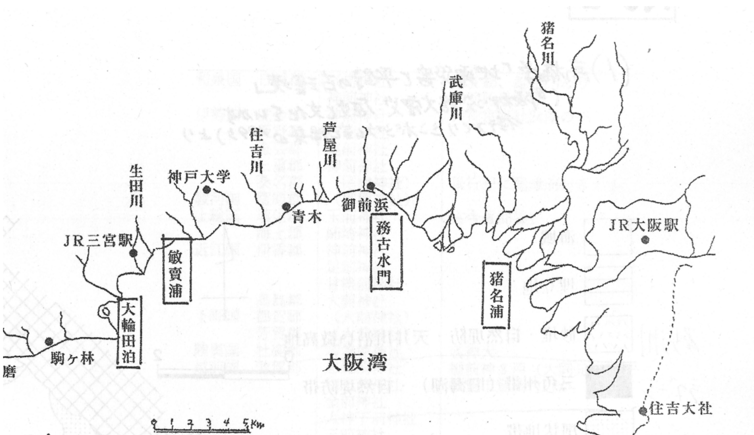
古代の西摂・神戸の浜辺と海洋信仰

神戸大学大学院人文学研究科講師
坂江（さかえ）渉（わたる）氏

＜プロフィール＞

1959年生まれ。1992年に神戸大学大学院文化学研究科を修了後、日本古代史を専門分野として、神戸大学、神戸女学院大学などで教鞭を執る。現在は神戸大学大学院人文学研究科講師。著書に「風土記からみる古代の播磨」（神戸新聞総合出版センター、2007年）。

今回のテーマとなる「西摂」とは西摂津のことで、摂津の国の西側になります。ごく大ざっぱにいうと現在の阪神間、尼崎から神戸市須磨区までにあたります。この地域での浜辺と海洋信仰、特に神様のお祭りの世界を中心にお話し、同時にどんな人たちが古代、この地域に住んでいたのかということも関連づけてお話したいと思います。



(1) 古代の西摂・明石海峡付近のミナト関連地図
(明治前期の陸測図をもとに作図)

古代の西摂には瀬戸内海を代表する著名なミナトがたくさんありました。地図をご覧ください。これは明治時代につくられ

た陸地測量図を縮小トレースしたもので、そこに昔の地名と現在の地名を掲載して復元してみました。

四角に囲ったミナトの名前が、「日本書紀」や「古事記」などに出てくる著名なミナトです。東側から、尼崎の猪名川の河口部付近にあったと言われている「猪名浦（いなのうら）」、武庫川の河口部の右側のはんらん源の支流あたりが「務古水門（むこのみなと）」、それから神戸市灘区岩屋付近に「敏賣浦（みぬめのうら）」、そして一番有名な「大輪田泊（おおわだのとまり）」。わずか50キロほどの範囲に「日本書紀」や「古事記」に描かれるようなミナトが４つも集まっているわけです。

今回注目したいのは、こういうミナトが古代の史料の中で、宗教的な呪術祭祀に関連して描かれているのが多い点です。

まず務古水門について、「日本書紀」をご紹介します。伝説上の皇后である神功（じんぐ）皇后は、夫の仲哀天皇が亡くなった直後、軍服を着て朝鮮半島に軍事出兵をしました。そして、それに勝利して凱旋すると、国内では反乱が起きていました。このときの話が、「神功皇后摂政元年二月条」になります。

山口県の方から瀬戸内海を渡って帰ってきて、武内宿禰を紀伊国（和歌山県）の方に送って、自分は直ちに「難波を指す」、つまり船に乗って難波の方に向かった。すると「時に、皇后の船、海中に廻りて、進むこと能はず」とある。海中にて船が進まなくなってしまったわけですね。そこで、「更に務古水門に還りましてトふ」と、ミナトで占いをした。すると、次々にいろんな神様が出てきた。まず天照大神が「我が荒魂をば、皇后に近くべからず。當（まさ）に御心を廣田國に居らしむべし」と、私は廣田神社に住みたいといった。それから色々な神社に住みたい神様が登場し、託宣を述べ、あなたを守ってあげようといったという話です。

今度は猪名浦について、「日本書紀」の「履中天皇五年条」です。履中天皇の后（きさき）が不幸にも亡くなった。どうして后が亡くなったか調べさせると、九州の宗像神社の神が、車持部という豪族を呼んで罪ほろぼしのために「長渚崎に出して、祓（はら）へ禊（みそ）がしむ。」現在の尼崎市内の「長渚（ながす）」の砂洲の先になりますが、そこでみそぎをさせたということですね。

さらにこの猪名浦に関しましては、「住吉大社神代記」という書物に、住吉大社の各地に分布している所領の一覧表がありますが、その１つに「神前審神浜（かみざきさにはのはま）」という名で出てきます。神前という地名は各地にたくさんありますが、「東を限る、江尻。南を限る、川。西を限る、為奈河。」というふうに書いていますから、やっぱり猪名浦の中に、住吉大社の所領となるような清浄なところがあったことになります。

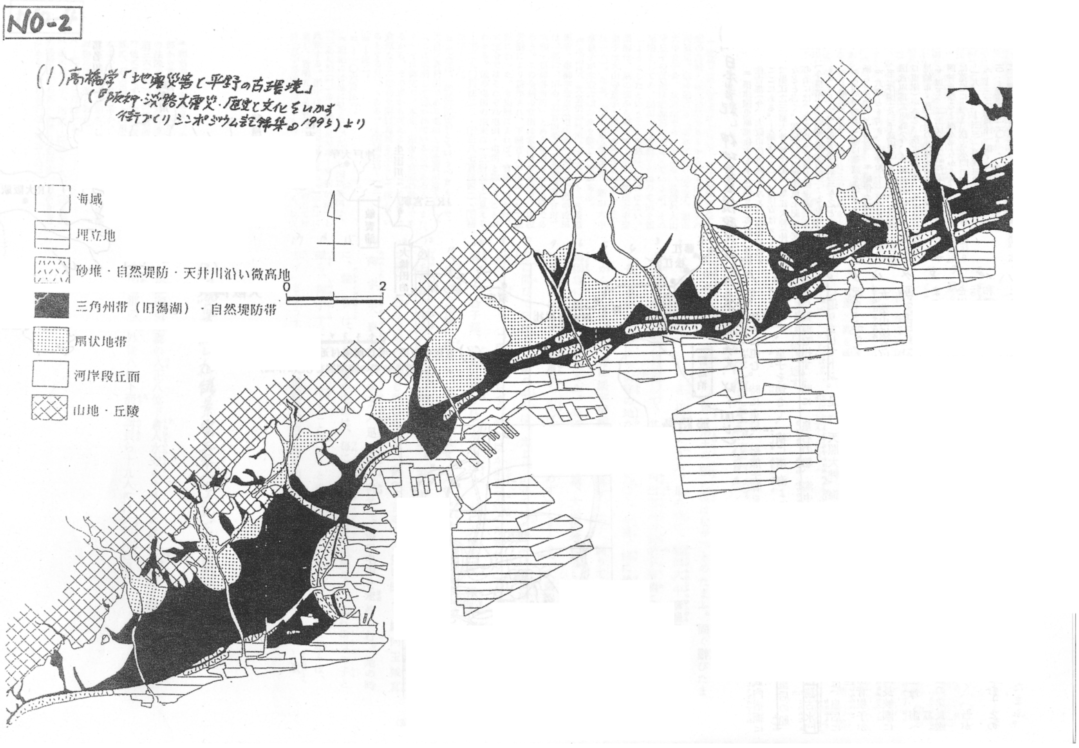
敏賣浦はどうか。史料をみるとやはり神が住んでいる場所があるとされています。現在、神戸市灘区の海岸線から段丘崖になった丘の上、国道２号の北側に敏馬神社という立派な神社が立っています。また「延喜式」という史料によるとミナト内の敏賣崎で新羅の船がやってきたときに神酒を支給するという史料もあります。

以上、神戸・西摂地域のミナトにおいて、宗教に絡んだ場所があることを示す史料をご紹介させていただきました。もちろんこれらはすべて説話で史実とは言いがたいのですが、古代のミナトには地元の人たちの信仰にかかわる空間が存在したという事実が、その前提にあると思うのです。

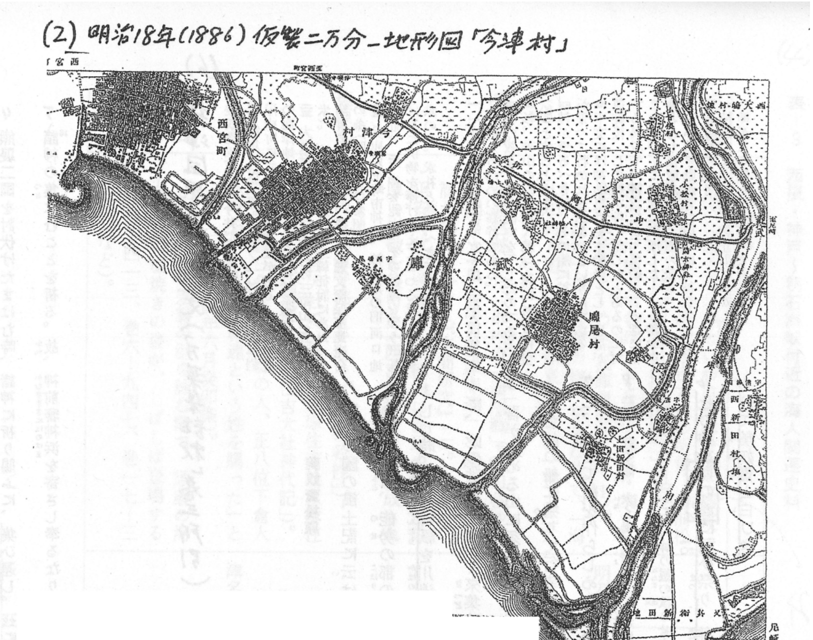
では、古代のミナトがなぜ宗教的な聖地として扱われているのかについて、説明します。西摂のミナトを自然環境の面から見てみましょう。そこで参考にしたいのは、古代のミナトについて一番の権威である立命館大学の日下雅義先生の「古代景観の復元」という本です。この方がおっしゃるには当時のミナトは現在とはまったく違うのだそうです。

なぜ違うかというと、古代の船は木造船で、すぐ壊れてしまいますね。ですので、当時の航海は陸沿いに航路をとり、しかも風待ち、潮待ちのできるところで止まりながら少しずつ進まなければなりません。つまり、風待ち、潮待ちのできるのに適した場所がミナトになるわけですが、当時は築港技術がありませんから、直接外洋に接していない陸地の裏側に停泊できるような自然地形が利用されました。

そこで、立命館大学の高橋学先生が地震直後に神戸大学で行われた震災に関するシンポジウムの資料をご覧いただけますでしょうか。神戸の沿岸部にある「三角州帯（旧潟湖）」が、いわゆるラグーン、干潟です。昔からこの地域には干潟が存在していたことがわかると思います。ところが、干潟が全面的にあるのではなくて、干潟と埋め立ての間に「砂堆（きたい）」があるのがわかりますでしょうか。これは普通の陸地より少し高い自然堤防、砂洲になります。



それは長細い砂洲に留まらず、やがて島状になりました。明治18年の仮製二万分一地形図の「今津村」をご覧いただけますでしょうか。これは現在の西宮市の南あたりになります。浜辺は一面砂で、水田ではないことがわかると思います。



さらに、尼崎のイラストレーターである井上眞理子さんが尼崎市立地域研究史料館と協力して、昔の武庫川付近、特に尼崎側がどんな地形であったかを聞き取りして復元されたマップがあります（同館蔵）。それをみるとかつてこの辺りにおいて、「上（かみ）の鼻（はな）」という、くちばし状に伸びた砂嘴があったことが分かります。

こうした地形がなぜできるかというと、神戸・西摂は六甲山がもろい花崗岩質である

ため、川伝いに砂が大量に流れてくるのですね。その砂によって、沿岸部に複合的で変化に富む自然地形が生まれたのです。

私はこうした豊かな砂が生む地形の中で、特に長く伸びる砂嘴に着目しました。なぜならば、「古事記」や「日本書紀」といった古代の史料を紐解くと、昔の人たちは突出形のものに対して神々しさを感じていたことがわかったからです。

例えば、刀剣類、矛(ほこ)類は抜刀(ばっとう)して上に捧げると神様がそこに寄りつくというような「古事記」の史料があります。それから柱、はしご、お箸、橋などにも神様が宿るというようなフォークロアがたくさんあります。突出したものは、かつて神様を呼び出す一種の道具であると考えられていたようです。それで、同時に陸地の突出地形も神が集まるところと考えられていたのではないかと思ったのです。

古代国家が非常に厚く優遇していた式内(しきない)社という、北は陸奥から西は対馬まで全国2,800ぐらいある社の中で、陸地が海に突出した場所に関する「サキ」という言葉に関連した神社名がどれだけあるかを調べたところ、30近く出てきました。

また、「日本書紀」や「古事記」にも、岬に関連した神様の話がたくさんあります。有名なものでは、２人１組で国づくりを行った大己貴命(おおなむち)と少彦名(すくなひこな)神の話です。大己貴命という神は、いわゆるダイダラボッチと呼ばれる巨人神。少彦名神というのは小人神で、一寸法師みたいな神様のことです。国づくりを終えると、少彦名は「遂に熊野の御埼(みさき)に行き、そこから常世郷(とこよのくに)に渡った」とあります。この熊野は現在世界遺産になっている紀伊の熊野であるというのが有力な説で、平安時代、熊野の岬の向こう側に常世の国があるという熊野信仰が平安貴族の間で盛んになり、熊野詣でが生まれたともいわれています。

先ほど神戸・西摂のミナトで呪術祭祀が多いと述べましたが、それらのミナトの内部や近くには、「サキ」というふうに書かれる何らかの場所があった。長渚崎、神前審神浜、敏賣崎。神の「サキ」なんですね。ミナトは元来へこんだところですが、その中でもラグーン状のところには砂嘴ができて、そこが地元の人たちの神寄せの場、神祭りの拠点になったというふうに思っております。

ただ、務古水門だけは、この「サキ」が出てこないのですが、ミナトというのは、陸地と陸地が切れて、奥まったところにあるゲートをミナトと呼ぶわけですね。だから務古水門にもこのゲートになる部分があって、先がとがったような地形があったのだろうと思います。

昔から現在まで続いて信仰されているような「崎」を調べてみましたら、大飛島（おおひしま）という島を見つけました。岡山県笹岡市から定期観光船で約１時間のところにありますが、そこは大潮になると韓国の珍島（ちんど）物語と同じように、海の中から普段見えない砂嘴が現れます。

２年前の１月の大潮の日に泊まりがけで行き、朝６時ぐらいに見ることができました。昔は向こうに見えている小飛島（こひしま）に届かんばかりの勢いで伸びて、小学生が学校から帰るとき、おおいと呼んだら、そこから親御さんが船で迎えに来てくれたそうです。大飛島付近は潮の干満により東西の豊後水道と紀伊水道の上げ潮が、ちょうどこの辺あたりで交わるそうです。それで、こうした現象が起きるそうです。現在は温暖化のせいで水位が上がっているから、長さ30メートルぐらいしか見えませんが、昔はもっと幅も長さも広かったそうです。

古代の遣唐使の時代にもここは有名だったようで、遣唐使の船が大陸に向かうときここに寄っているのですね。というのも、この写真の右側に小学校があり、鉄棒か何かをつくつときにそこを掘ったらざくざくと中央系の品物（供え物）が出てきたのです。それにより、遣唐使が確実にこの地を訪れていることがわかりました。やはり、昔からこの地は崇敬を受けていたようだということです。

これは大飛島の州の南の遺跡で、天然記念物です。専門家が数回の発掘調査を行ったところ、奈良三彩のつぼ11個、銅盞13個、皇朝十二銭121枚、宋銭、銅銭が出てきました。宋銭ですから、平安時代も鎌倉時代もここに立ち寄ったわけですね。

それから、日本三景の１つ、丹後の天橋立です。これは非常に大きな砂嘴ですね。「丹後国風土記」にも記載されており、昔からあったことがわかります。

天橋立には、天のはしごを成相寺付近に建てたところ、神様が昼寝をしている間にそれが倒れたという伝承があります。だから、本当は天の橋倒しだと思うのですが、ブリッジ状になっているから、天橋立だそうです。

この一番先に井戸がありまして、名水100選である磯清水が湧いており、そのすぐそばに天橋立神社があります。やはり昔から宗教的な聖地のようです。さらにこの天橋立のつけ根のところに、丹後一宮の籠神社があり、これも天橋立に関係する宗教的なものだというふうに私は思っております。

このように、地形も含めて突出したものというのは、かつて神様を呼び出す聖なる場所、聖なる道具であると考えられていたのです。つまり、古代西摂・神戸のラグーン状のミナトには様々な砂状の地形があり、特にその中で海に向かって突出する砂嘴は海の神様を迎える聖地だったのですね。

西摂・神戸のミナトとはお祭りをするような神聖な場所であったことがおわかりになったかと思いますが、さらに考えてみたいのは、どうして古代の史料ではそういう場所で国家の祭祀を行ったのかの問題です。

そのヒントとなるのは、最初にも紹介しました神功(じんぐ)皇后が新羅へ軍事征討する話の中で、この西摂・神戸がよく出てくる事実です。この軍事征討の話は、もちろん架空の話です。ただ、朝鮮半島に対して大和朝廷が全く軍事的な関係を持たなかったかというと、決してそうではないということも、最近の研究でわかってきました。

それによると、日本の大和政権は西暦４世紀半ば以降、朝鮮半島の百済、その東にある伽耶(かや)諸国－－その中でも金官国、卓淳、駕洛(から)。それら４つの国々との間で日本は対等互酬(ごしゅう)の軍事同盟を結んだのです。対等互酬の内容は、百済を始めとする４つの国から日本は先進的な文物、特に鉄資源を受けた。他方日本は軍事力を提供したといわれています。つま

り、ミナトはそれらの国々とやりとりをする航路の途中にある神聖な場所になるわけです。当時の航海は命がけの旅でしたから、宗教的なお祭りが航海の度に王権を挙げて行われたのだろうと考えられるわけです。

かつて古い時代、船乗りたちが航海の安全と無事の帰国を祈る、そうした安全祈願のために祭りをしたようです。そうなると問題は、単なる安全祈願というのであれば、どうして難波を出てすぐの西摂・神戸で、わざわざ頻繁にお祭りをしたのかということなんですね。

国家がここで祈りを捧げる理由は、安全祈願とは別にもう一つあり、地域の神様を信奉する集団のための祈り、すなわち彼らを王権が動員・編成するための、打算的な祈りということがあったのではないかと考えられます。つまり、臨時の祭祀・奉幣をすることによって、実際の航海を担い、水軍兵力になる特殊な力を持った海人(あま)たちを動員したのではないかと思うのです。ここで「あま」と言いましたが、古代の海人と呼ばれる人たちは、よく我々の知っている単なる漁師、単なるダイバーではありません。王権に強く従属している、直属性が非常に強い。しかも王権の海外出兵とか外交を支える、一番重要な役割を担うのが海人です。日本の歴史上あまり表に出てこない存在ですが、でもかなり重要な役割をはたしたのが彼らです。

１つは古代の海人は、平常時、海産物、食料品、それから飲み水を得て、それを王権に提供するという役目を果たします。淡路島の水を淡路島の海人が大王に進上したという話が出てきます。

２つ目が王権の海外輸送の担い手としての役割です。「日本書紀」とか「古事記」には淡路島の海人がたくさん出てきます。「応神天皇二十二年条」では、天皇の后(きさき)の１人が吉備に帰りたいといった。そこで「仍りて淡路の御原(みはら)の海人」に命じて送らせたと出てくる。ここには「御原」、すなわち三原郡とありますから、現在の南淡路市の阿万(あま)町あたりの海人が動員されたと考えられています。

もう１つは国際的な中身の説話、韓国、唐国に水軍として派遣されるという史料があります。「吾子籠(あごこ)、韓國に遣されて未だ還ず。爰に大鷦鷯尊」仁徳天皇ですね、「淤宇(おう)に謂(かた)りて曰はく、「なんじ躬(みずか)ら韓國に往(まい)りて、吾子籠を喚せ。其れ日夜兼ねて速やかに往(まい)れ」とのたまふ。」と、大急ぎで行くことが命じられます。その時動員されたのが「淡路の海人八十(やそ)」とある。やはり淡路島の海人が国際交通にかかわっているということです。これ以外の史料にも出てくるのですが、やっぱりそういう水軍兵力としても活躍するというの

が古代の海人なんですね。

つまり、朝廷の船が海外出兵とか交渉時に船を出すとき、そういう人たちの力を借りなければいけない。そこで、そういう人たちが普段お祭りをする神様をお祭りすることで厚い待遇を行ったとアピールしたのではないかと思うわけです。だから、彼らの根拠地のミナトに入ったときには、そのミナトの聖地で臨時の幣（みてぐら）を奉る。海人たちを海外遠征に動員・編成するための象徴的行為が、古代の臨時の国家的祭祀だというふうに考えております。

最後になりますが、ではこの阪神間にどのような海人勢力が居住していたのでしょうか。

この地域には、古代だけではなく中世・近世もそうですが、有力な大豪族とか、大大名がいたかというと、あまりいません。古代においても政権の中枢部に入るような単一の有力氏族はいません。ただ、海軍兵力にもなる海人が集中的にいたと私は考えております。

「続日本記」神護景雲三年（西暦769年）六月癸卯条に、「摂津国菟原郡の人」、菟原郡というのは現在の神戸市の灘区、東灘区、芦屋市の一部ですが、「正八位下倉人水守ら十八人に姓を大和連と賜ふ」とあります。大和連というのは、大和の国に住んでいた大豪族で、もともとは明石海峡付近に住んでいて、垂水に海神社というのがありますが、あのあたりにいた海人の総元締めのような氏族です。

また、明石海峡付近ですが、「播磨国明石郡の人外従八位下海直溝長」と、これはまさしく海神社で付近に海人がいたことを示しています。明石海峡の両側のうち、北側は明石城の付近に海人の根拠地があり、南側は北淡蝶の野島浦あたりが海人の根拠地だったようです。

もっと東の方の猪名浦では、尼崎付近に津守連という海人がいたという史料がありますし、万葉集にも「海人の釣り舟」というのが出てきます。

それから尼崎については、鎌倉時代の書物では「尼崎」は「海人崎」と書かれています。昔は「アマ」がたくさんいて、崎があったのでしょう。その他にも武庫郡、菟原郡、それから八部郡、須磨のあたりにも海人を詠む史料があります。このように古代の西摂・神戸、それから明石海峡、淡路島付近には非常にたくさんの海人がいたと考えられるわけです。

最後に簡単にまとめますと、大和朝廷が海外遠征をするときに、臨時の形ではありますが、軍事勢力にもなる海人が信奉する砂嘴（聖地）でお迎えする神様にお祈りするために、素通りするのではなくて、わざわざ一旦入港し、幣を差し上げた。また海人勢力の側にお

いてもそのような要望を出していたのでしょう。

　以上で終わりたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。